

保育者養成における「絵本の読み聞かせ」の自己教育モデルの構成

～PDCAサイクルと自己調整学習の社会的認知モデルの視座から～

Composition of the Self-education Model of "Picture Book Reading"
in Childcare Provider Training : From the Perspective of the PDCA Cycle
and the Social Cognitive Model of Self-Regulated Learning

佐々木 郁 子

Ikuko Sasaki

In this paper, we examined a method for independently reading picture books to students at a training school for childcare providers prior to their practicum. As a result, we were able to construct a self-educational model of picture book reading, the SUDSIP model, based on the PDCA cycle and the social cognitive model of self-regulated learning. Furthermore, we demonstrated the effectiveness of this model.

1. はじめに

保育者を志す学生にとって保育実習や教育実習は大きなイベントである。それゆえ、学生は、保育実習や教育実習の事前に、授業内だけではなく、授業外の時間を用いて実習の準備を行なっていると思われる。小屋(2010)や佐々木(2021)は、保育実習や教育実習を終えた学生に対して、実習前にもっと練習しておきたかった内容についてアンケート調査した。その結果、「絵本の読み聞かせ」、「手遊び」、「ピアノ」、「指導案や実習日誌の書き方」が多いことを報告している。特に、絵本の読み聞かせは、言葉への興味や獲得を促進するだけではなく、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わえることから、情緒面の発達を促すという意味でも大切である。

一方、絵本の読み聞かせは手遊びやピアノと比較して、保育者養成校において練習する機会が少ないと思われる。保育者養成校における授業でも、絵本の読み聞かせは扱われるが、時間的な制約から、一人ひとりの学生が十分に練習する時間と機会を確保することは困難である。したがって、絵本の読み聞かせの練習は、学生の授業時間以外の自主的な練習を行う必要があるが、どのような点に気を付けて読めば良いのか、自分がどのように読んでいたのかを確認することも困難である。そこで、佐々木(2023)は、実習を控えた学生が、自立的に絵本の読み聞かせの技術を向上させる自己教育モデルとして、SUDSIPモデルを試案として提案している(図1)。SUDSIPモデルは、「絵本の選定」(selection)、「内容理解」(understanding)、「読み聞かせ」(Do)、「自己評価」(self-evaluation)、「改善方法の検討」(improvement)、「実践」(practice)の6

フェーズから構成される、絵本の読み聞かせの自己教育モデルである。

2. 研究の目的と方法

本研究では、佐々木(2023)が提案したSUDSIPモデルを理論的に検討して再構成することを目的とする。佐々木(2023)は、SUDSIPモデルを構成する際、絵本の読み聞かせの練習は継続的な改善を伴うことが必要であると考え、企業において品質管理など業務管理における継続的な改善方法として知られる「PDCAサイクル」(plan-do-check-act cycle)を参照している。このサイクルは、「計画」(Plan)、「行動」(Do)、「評価」(Check)、「改善」(Act)の4つのフェーズから構成され、品質管理以外の分野でも広く参照されているモデルである。

SUDSIPモデルでは、「絵本選定」、「内容理解」がPDCAサイクルの「計画」に対応し、「絵本の読み聞かせ」が「行動」、「自己評価」が「評価」、「改善方法の検討」が「改善」にそれぞれ対応している。また、SUDSIPモデルは、学生が絵本の読み聞かせの練習を一人で行うことを想定したモデルであるため、自己調整学習の視座からSUDSIPモデルに対する考察を加える必要がある。したがって、本研究では、PDCAサイクルと自己調整学習の理論的整合性を明らかにした後、それらを理論的な基盤として、SUDSIPモデルを再構成する。

3. 読み聞かせのSUDSIPモデルの構成

(1)絵本の読み聞かせの練習と自己調整学習

保育者を志望する学生が行う絵本の読み聞かせの練習には、他の学生や教員の前で行う場合や、自分自身で行う場合がある。前者の場合は、他の学生や教員からのフィードバックが得られ、それが改善へつながることになるが、後者の場合は他者からのフィードバックが得られないことから、自己調整が重要となる。

自己調整は教育学や心理学で多様な意味で用いられているが、Zimmerman(1989)によれば、自己調整学習における「自己調整」とは、「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義している。これよりもっと正確な定義は、研究者の理論的な見方によって異なる。伊藤(2009)によれば、自己調整学習の諸理論は、Zimmermanらの社会的認知モデル、Pintrichの自己調整モデル、Borkowskiのメタ認知のプロセス志向モデル、Winneの自己調整の4フェーズモデル、Boekaertsの適応的学習モデル、Cornoの意志理論、Maceらのオペラント理論、McCombsの現象学的視点、McCaslinらのVygotsky派の見方、Parisらの構成主義に分類される。

絵本の読み聞かせの練習は、技術的な向上を目指すという学生自身の「個人作用」、技術的向上を目指して練習するという「行動」、学校、自宅、実習園などの読み聞かせの場、つまり「環境」の相互作用により行われる。個人作用、行動、環境の3者の相互作用として人間の機能を捉え

る考え方はBandura (2001)の社会的認知理論と同じであり、この考え方を概念的枠組みとするのが自己調整学習の社会的認知モデルである。したがって、絵本の読み聞かせの練習を自己調整学習の視座から捉えようとする場合、自己調整学習の社会的認知モデルを基礎におくことにする。自己調整学習の社会的認知モデルでは、自己調整は、自己観察、自己判断、自己反応の3つの下位過程に区別される。これらは独立したものではなく、相互作用していると考えられ、自己観察によって、学習者は自己評価が促され、そして、このような自己判断が、多様な個人的で行動的な自己反応へ導くと考えられている(塚野, 2012)。

(2)PDCAサイクル

佐々木(2023)は、SUDSIPモデルを構成する際、絵本の読み聞かせの練習は継続的な改善を伴うことが必要であると考え、企業において品質管理など業務管理における継続的な改善方法として知られるPDCAサイクルを参照している。このサイクルは、品質管理や業務管理だけではなく、他の様々な領域でも参照されており、幼児教育においても参照に値すると思われる。

幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)の第1章 総則 第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価 4 幼児理解に基づいた評価の実施(1)において、「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」と規定されている。このことは、幼児教育において評価及び改善を継続的に実施することであり、PDCAサイクルを具体的に示したものである。また、岸(2023)も、保育士もPDCAサイクルにより保育の質の継続的な改善を行なっているのではないかと考え、現役の保育者を対象として調査を行なった結果、PDCAサイクルを個人的に活用している保育士がいることを明らかにしている。絵本の読み聞かせの場合、技術的な向上を目的とする練習は、継続的な改善と反復を伴うことから、絵本の読み聞かせの自己教育プログラムの構成にPDCAサイクルを基盤としてもよいといえる。

(3)自己調整学習の社会的認知モデルとPDCAサイクルの理論的整合性

本研究では、PDCAサイクルを基盤として、絵本の読み聞かせの自己教育モデルを構成しようとしているが、上述した通り、絵本の読み聞かせの技術向上には、個人作用、行動、環境の3者による相互作用が不可欠である。この考え方は、自己調整学習の社会的認知モデルの考え方である。このとき、自己調整学習の社会的認知モデルとPDCAサイクルに理論的整合性があることを示しておく。

自己調整の社会的認知モデルは、自己観察、自己判断、自己反応の3つの下位過程から構成されている。自己観察と自己判断の過程はPDCAサイクルの「評価」に対応し、自己反応が「改善」にあたる。したがって、自己調整の社会的認知モデルは、PDCAサイクルの一部に組み込まれていると考えることができることから、自己調整学習の社会的認知モデルとPDCAサイクルは理論的な整合性をもつといえる。

(4) 絵本の読み聞かせの評価シートの検討

絵本の読み聞かせに関する評価の視点は、『よみきかせのきほん 保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』(東京子ども図書館編, 2018)を参考に作成した(表1)。評価の視点は、全体評価と場面別評価に大別し、全体評価には、絵本の持ち方、読み上げ方、絵本のめくり方の3つの小分類を設け、場面別評価には、準備場面、導入場面、終了場面の3つの小分類を設けた。場面別評価に展開場面がないのは、展開場面の評価項目が全体評価に含まれていると考えられるからである。このように分類したうえで、絵本の読み聞かせ自己評価シートは、全部で16項目から構成されている。また、それぞれの項目に対して、「1. できなかった」、「2. あまりよくできなかった」、「3. 少しよくできた」、「4. よくできた」の4件法で回答する。

以下、自己評価シートの各項目の内容について説明する。

表1における全体評価1「絵本の持ち方」の第1項目(1)は「絵本がグラグラしたり、傾いていないか」である。読み手は、時と場合により、立って読む、椅子に座って読む、直接床に座って読むなど、様々な体勢で読むことがある。そのため、聞き手が絵本に集中し、絵本の世界に入り込めるように、脇をしっかりと締め、絵本の中心部分をしっかりと持ち、安定していることが大切である。

表1. 絵本の読み聞かせ自己評価シート

| | | | |
|-------------|---|---------|---|
| 全 体 | 1 | 絵本の持ち方 | (1)絵本がグラグラしたり、傾いていないか (2)自分の持ち手で絵本を隠していないか |
| | 2 | 読み上げ方 | (3)場面によって緩急をつけて読んでいたか (4)言葉をはっきりと読んでいたか (5)全体に届く声の大きさだったか (6)つまずくことなく読んでいたか (7)演じすぎていなかったか (8)聞き手全体に目配りしていたか |
| | 3 | 絵本のめくり方 | (9)スムーズにめくっていたか (10)話の流れに合わせてめくり方か (11)めくった直後に新しい絵に集中させるための間をとったか (12)めくる準備をして聞き手の視界を遮っていなかったか |
| 各 場 面 | 4 | 準備場面 | (13)物語の流れを理解していたか |
| | 5 | 導入場面 | (14)表紙をしっかりと見せていたか |
| | 6 | 終了場面 | (15)裏表紙を見せ、表紙に戻っていたか (16)最後まで読み切ったか |

次に、第2項目(2)は「自分の持ち方で絵本を隠していないか」である。読み手は、絵本を安定して持とうと集中するあまり、絵本の中に描かれている文や絵を持ち手で隠してしまう場合がある。絵本を自分の体の横に持ち、聞き手に絵をしっかりと見せてあげることが大切である。

表1における全体評価2「絵本の読み上げ方」の第1項目(3)は「場面によって緩急をつけて読んでいたか」である。これは、読み手が全体の流れを捉えた上で、場面に応じてある程度の緩急をつけることにより、聞き手がより絵本の世界に入る助けになる。

第2項目(4)は「言葉をはっきりと読んでいたか」である。絵本は、文と絵が上手く1つに合う

ように考えられている。そのため、書かれている言葉を略したり、自分の言葉を付け加えたりせず、絵本に書かれている言葉を正確にはっきりと読むことが大切である。また、読み聞かせは、無意識に早口になりがちなため、ゆっくり読むことも意識する必要がある。

第3項目(5)は「全体に届く声の大きさだったか」である。読み手は、聞き手の年齢や人数、場所など、その時々に応じて、声の大きさを調整し、全体に届く声でなければならない。また、読み手は、絵本を読むと同時に、聞き手の表情や様子を見たりするため、常に同じ場所に向かって声を発するわけではない。聞き手全体に声が届いているかを常に確認する必要がある。

第4項目(6)は「つまずくことなく読んでいたか」である。これは、せっかく聞き手が絵本に集中していたとしても、読み手がつまずきながら読んでしまうと、現実の世界に引き戻されてしまう。読み手は必ず下読みをし、聞き手の集中力を途切れさせないようにする必要がある。

第5項目(7)は「演じ過ぎていないか」である。登場人物や会話の部分など、場面によって多少声色を変えたり演じたりする場合がある。しかしながら、絵本を揺らしたり、大袈裟に声色を変えたり、身振り手振りを使って表現してしまうと、聞き手一人ひとりの想像力や創造力を途切れさせてしまう。また、そのような読み方をすると、聞き手は絵本ではなく、絵本を読んでいる人に注目してしまう。読み手はあくまでも黒子だということを意識して読む必要がある。

第6項目(8)は「聞き手全体に目配りしていたか」である。読み手は、聞き手の視線や表情から絵本に入り込んでいるか、興味を示しているか、読み聞かせと聞き手のペースが合っているか等を確認して読み進めていくことが大切である。また、特に聞き手の年齢が低い場合は、聞き手同士のトラブルが起こっていないか、その場を離れることがないか等の安全に配慮する必要がある。

表1における全体評価3「絵本のめくり方」の第1項目(9)は「スムーズにめくっていたか」である。読み手がページをめくる際に、もたついたり、2枚一度にめくって後戻りしたりすると、聞き手の集中力が切れ、興が削がれてしまう。読み手は、聞き手の邪魔にならないようにスムーズにめくる準備をしておく必要がある。

第2項目(10)は「話の流れに合わせためくり方か」である。読み手は、全体を捉え、次の場面がどのような流れになるかを把握した上で、話のテンポや情景描写に合わせてゆっくりめくったり、さっとめくったりすることが大切である。

第3項目(11)は「めくった直後新しい絵に集中させるための間をとったか」である。聞き手は、新しい場面が現れた時、絵に集中する間が必要である。万が一、間を取らずにめくり同時に文を読みはじめてしまうと、聞き手の頭上を文だけが通り過ぎてしまい、文と絵が一体ではなくになってしまう。その場面に合わせた間の取り方も確認しておく必要がある。

第4項目(12)は「めくる準備をして聞き手の視界を遮っていなかったか」である。絵本は、中央部分をしっかり持ち、もう片方の手でページをめくるようにするが、絵本の上部や中心に近い

部分をめくろうとすると読み手の腕で絵を隠してしまうため、注意が必要である。

表1における場面別評価4「準備場面」の第1項目(13)は、「物語の流れを理解していたか」である。どの絵本にも起承転結のように流れがある。緩やかに始まり、徐々に盛り上がり、クライマックスでもっと力が入り、その後は緊張が一気に緩んで静かに終わる。読み手は必ず下読みをし、内容を十分理解した上で、読みが平板にならないようにすることが大切である。

表1における場面別評価5「導入場面」の第1項目(14)は、「表紙をしっかりと見せたか」である。表紙のタイトルや作者を読み上げ、表紙をしっかりと見せることが、聞き手にとって良い間となり、それが絵本の導入となる。また、絵本の表紙と本体をつなぐ役割である見返しも同様に聞き手にしっかりと見せることで、聞き手は心を落ち着かせ、あるいは心を弾ませ、より絵本の世界に入りやすくなる。

表1における場面別評価6「終了場面」の第1項目(15)は「裏表紙を見せ、表紙に戻っていたか」である。絵本には、表紙と裏表紙が一つの絵になっていたり、その後の物語を想像させてくれる挿絵が書いてあったりして、物語の余韻を楽しめるものが多い。

第2項目(16)は「最後まで読み切ったか」である。これは、時間の都合や読み手の気分で言葉を端折ったり、ページを飛ばしたりせず、最後まで読み切ることが大切である。

(5)絵本の読み聞かせのSUDSIPモデルの構成

絵本の読み聞かせの技術の向上には、練習と改善を継続的に繰り返すことが必要である。

何故ならば、絵本の読み聞かせは、読み手の発話の仕方、一連の動作、環境構成、その時の子どもの状態など、多くの要因が複雑に関連していることから、すべての要素が満足されることがないと考えられ、常に改善点が現れるからである。そこで、本研究では、企業において品質管理など業務管理における継続的な改善方法として知られるPDCAサイクルを基にして、絵本の読み聞かせ技術向上のための方法について検討した。その結果、図1に示す絵本の読み聞かせのSUDSIPモデルが構成できる。佐々木(2023)においてSUDSIPモデルについては簡潔な説明にとどまっていたことから、ここで詳細について説明する。

PDCAサイクルは、上述した通り、「計画」、「行動」、「評価」、「改善」の4つのフェーズを反復することにより、業務を継続的に改善する方法である。このサイクルを絵本の読み聞かせの文脈に対応させると、初期フェーズは「絵本の選定」、「絵本の内容理解」であり、これがPDCAサイクルの「計画」に対応する。

続いて、PDCAサイクルの「実行」に「読み聞かせ」が対応する。ただし、SUDSIPモデルでは、絵本の読み聞かせを行う場面は、「読み聞かせ」と「実践」の2つのフェーズにある。前者は学内で行う読み聞かせであり、後者は園で子ども達を対象とした読み聞かせである。SUDSIPモデルにおける「Do」は、前者の読み聞かせ場面を意味している。また、読み聞かせを行う場合、スマートフォンを設置して、動画撮影機能を用いて自らの読み聞かせを撮影し、この後のフェー

ズの自己評価に利用する。このとき、学生の読み聞かせの様子を撮影した動画を、評価に用いることの妥当性も検討しなければならない。

吉永ら(2015)は、保育表現技術の相互作用の側面の視座から自己教育プログラム構成を試みており、読み聞かせに関して、自己の読み聞かせの技能を客観的・反省的に捉え、その向上を図ることを企図して、学習プロセスにビデオ映像を用いた自己評価を組み込んだ。結城ら(2015)は、吉永ら(2015)が構成しようとしている自己教育プログラムの効果を検証している。絵本の読み聞かせに関して、視認可能な技術部分について、ビデオ映像を観て評価した場合は、養成校の教師などの他者から評価された場合と大きな差がないことを明らかにしている。このことは、学生が一人で絵本の読み聞かせを行なう場合、つまり、読み聞かせを評価してもらえ他者がいなくても、ビデオ映像が視認可能な技術部分の練習に用いる可能性を示唆している。したがって、学生の読み聞かせの様子を撮影した動画を、評価に用いることが可能であると考えられる。

PDCAサイクルの「評価」に対応するフェーズは「自己評価」である。通常、保育者養成校において、模擬授業などの評価は、自身の振り返りの他、ピア評価や教員からの評価も含まれるが、SUDSIPモデルでは、自己評価シートを用いて読み手が単独で行う評価を意味する。本研究では、教員や同級生がいない場合でも自身で練習を可能とするモデルの構成を目指しているため、読み手が単独で評価する必要がある。しかしながら、自分自身以外からの他者からの評価がない状態で、自らの読み聞かせを評価し、改善点を見出すことは難しいと考えられる。そこで、自己評価シートによる自己評価を、読み聞かせ終了直後の評価、動画を視聴しながら評価するといったように、2度行い、両者の評価の違いを検討することで改善点を見出す。読み聞かせ直後の自己評価は、読み手自身の実感をもとにした評価であり、動画を視聴しながら自己評価した結果は、自分の読み聞かせをある程度客観的にみた評価である。したがって、両者の間には違いが生じる場合がある。そして、違いが生じた項目を中心に「改善方法の検討」を行うのである。これら、「読み聞かせ」、「自己評価」、「改善方法の検討」を循環させるDSIサイクルが、SUDSIPモデルの核心部分である。

DSIサイクルによる練習の後、実際に園において子供たちを前に読み聞かせを行う。これがSUDSIPモデルにおける「実践」のフェーズである。読み手は実践を詳細に記録して、DSIサイクルへと還元させる。図1におけるDSIサイクルと「実践」が双方向の矢印で結ばれているのは、そのような意味からである。

以上が、「絵本の読み聞かせのSUDSIPモデル」と、その構成方法についての説明である。このモデルに従うと、図2に示すフローにより、絵本の読み聞かせを練習することになる。

以下、図2のフローについて説明する。

第1フェーズは「内容理解」であり、選定した絵本の内容を理解する。絵本の内容理解では、

何をどのように、どこまで深く理解するかは読み手によって様々であることが考えられるが、どこまでの理解が必要であるかは、SUDSIPモデルにおける「改善方法の検討」で改善を要する内容として顕在化されたときに明らかにされるものと考えられる。

絵本の内容理解の後には、学内や自宅において絵本の読み聞かせを行うフェーズである。このとき、絵本の読み聞かせを行っている様子を撮影することに留意する。読み聞かせ終了後に表1に示す「絵本の読み聞かせ自己評価シート」に記入する。次に、動画を視聴しながら、再び自己評価シートに記入する。読み聞かせ直後に記入する自己評価シートと動画視聴しながら記入する自己評価シートの評価項目は同一である。これは、読み手の主観性と動画から明らかにされる客観性を比較するからである。

さらに、次のフェーズにおいて、2枚の自己評価シートを比較して改善点について検討する。このとき、改善点は、読み聞かせの直後に、読み手自身が気付く改善点と、読み手自身では気付にくい改善点がある。前者の改善点は、読み手自身が既に改善点として意識している。したがって、2枚の自己評価シートにおける評価が異なる項目から、読み手自身で気付くことが難しい改善点を顕在化させる。大学内や自宅における絵本の読み聞かせの練習では、読み聞かせ、自己評価、改善方法の検討のサイクル(英語表記の頭文字をとり、DSIサイクルとよぶ)により練習を繰り返す。また、これらのサイクルを循環する過程において、必要に応じて絵本の内容理解のフェーズに戻る。

学内や自宅における練習の過程の後には、園における「実践」である。実際に園児に対する絵本の読み聞かせを行い、自ら課題や改善点を見出すフェーズである。読み手は、終了後に読み聞かせの様子を詳細に記録し、それを改善点として、再びDSIサイクルに戻って練習する。

実習前の練習を想定する場合、読み手が単独で行うことの出来る練習は、DSIサイクルのみであり、実習が「実践」に相当する。また、学外に、協力園がある場合は、DSIサイクルの練習と実践を相互に行うことができる。

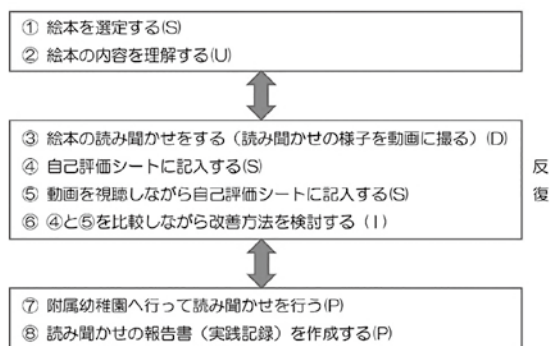


図2. SUDSIPモデルに沿った練習の過程

4. SUDSIPモデルを用いた実践

絵本の読み聞かせのSUDSIPモデルに沿った練習を以下の要領で行った。

協力者は私立短期大学部幼児教育学科の2年次生1名である(以降、学生Sと記す)。日時は、1回目の「読み聞かせ」「自己評価」「改善方法の検討」を20XX年X月X日(水) 9:00~10:30、2

回目の「読み聞かせ」「自己評価」「改善方法の検討」を20XX年X月X日(水) 9:00～10:30に私立大学短期大学部のゼミナール室において実施した。さらに、実際に子ども達への実践は、20XX年X月X日(水)10:40～12:10に同私立大学附属幼稚園において実施した。

学生Sが選定した絵本は『てぶくろ』(エウゲーニー・M・ラチョフ, 1965)である。

読み聞かせ直後の自己評価と動画視聴して行った自己評価を表2に示す。

1回目の読み聞かせの直後の自己評価で肯定的評価だが動画視聴した自己評価で否定的評価となった項目は表1の項目(2)、(10)および(12)である。この時、学生Sは「自分では全く気づいていなかったが、動画を視聴してみると、自分の手で絵本を隠してしまっている場面があった。」「単調で、動物が沢山出てくる絵本なので、話の流れに合わせためくり方に工夫があると聞き手のイメージを壊さずに済むのではないかと感じた」「めくことに意識が入ってしまい、聞き手の視界を遮っていた場面があった。動画を視聴すると、自分の気づかない部分が沢山わかったので、一つずつ改善していきたい」とコメントしている。

1回目の読み聞かせの1週間後に2回目の読み聞かせを行った。読み聞かせの直前に、1回目に抽出した改善点を確認してから、2回目の読み聞かせを行った結果、いくつかの改善点がありながらも、1回目に抽出した改善点のうち、項目(2)および(12)は解消され、項目(10)のみという結果になった。この結果について、学生Sは「全体的に常に聞き手の立場になって読むことができた。ただ、話の流れに合わせためくり方については、ゆっくりめくったり、間を持たせたりして、聞き手が絵本に入り込みやすくするためにもうひと工夫が必要だと思った。特に、この絵本は、身近な動物が沢山出てくるので、次の展開にワクワク感やドキドキ感を持たせながら、子ども達がより楽しめるようにしたい」「めくること自体にまだ不安があるので、例えば、絵本の端に軽く折り目をつけておくのも一つの工夫だと感じた」とコメントしている。学生Sは、自身の読み聞かせの課題を解消するために試行錯誤しながら工夫している様子が伺える。

これは本研究で提案したSUDSIPモデルという自己教育プログラムに内蔵される「読み聞かせ」「自己評価」「改善点の検討」というサイクルが工夫する機会を創出している可能性がある。

2回目の読み聞かせ後に、学生Sは附属幼稚園において読み聞かせの実践を行った。その時の振り返りにおいて学生Sは「課題であった流れに合わせためくり方、自己練習していた時よりも上手にできたと思う。子ども達の表情を見なが

表2. 学生Sの自己評価シート

| 評価項目 | 1回目 | | 2回目 | |
|------|-----|------|-----|------|
| | 直後 | 動画視聴 | 直後 | 動画視聴 |
| (1) | 2 | 2 | 3 | 3 |
| (2) | 3 | 2 | 2 | 2 |
| (3) | 3 | 3 | 3 | 3 |
| (4) | 2 | 4 | 3 | 3 |
| (5) | 3 | 4 | 3 | 3 |
| (6) | 3 | 3 | 2 | 3 |
| (7) | 2 | 3 | 2 | 2 |
| (8) | 2 | 2 | 3 | 2 |
| (9) | 2 | 3 | 2 | 2 |
| (10) | 3 | 2 | 3 | 2 |
| (11) | 2 | 2 | 3 | 3 |
| (12) | 3 | 2 | 2 | 3 |
| (13) | 4 | 4 | 3 | 3 |
| (14) | 4 | 4 | 4 | 4 |
| (15) | 3 | 4 | 4 | 4 |
| (16) | 4 | 4 | 4 | 4 |

ら自分も間を取りながら楽しんで読み聞かせができたと思う」とコメントしている。実際に子ども達の表情を見て、子ども達の発言に耳を傾けながら読み聞かせを行い、自分自身の読み聞かせを客観的に見るができたと思われる。

引用文献

- 1) 小屋美香：保育実習中の学生の幼児保育体験に関する研究，育英短期大学研究紀要，27，pp.33-44，2010.
- 2) 佐々木郁子：教育実習における学生の幼児教育体験を基にした事前事後指導内容の検討，東京経営短期大学紀要，29，pp.55-56，2021.
- 3) 佐々木郁子：保育者養成における「絵本の読み聞かせ」技術向上の方法の検討～「絵本の読み聞かせのSUDSIPモデル」の提案と実践～，日本基礎教育学会紀要，28，pp.65-70，2023.
- 4) Zimmerman, B.J. : A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81, pp.329-339, 1989.
- 5) 伊藤崇達：「自己調整学習の問題点」，『自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割』，北大路書房，pp.3-5，2009.
- 6) Bandura, A. : Social cognitive theory : An agentic perspective. *Annual Review of Psychology*, 52, pp.1-26, 2001.
- 7) 塚野州一：「自己調整学習と学食の諸理論：概観と分析」，『自己調整学習の理論』（バリー・J・ジーマン，ディル・H・シャンク編著，塚野州一編訳），北大路書房，p.22，2006.
- 8) 文部科学省：平成29年告示 幼稚園教育要領，2017.
- 9) 岸久美子：幼児教育におけるPDCAサイクルの活用-保育現場における実践-，相模女子大学紀要，86，pp.1-6，2023.
- 10) 東京子ども図書館：『よみきかせのきほん 保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』，東京子ども図書館，pp.2-6，2018.
- 11) 吉永安里・結城孝治・吉永安里・山瀬範子・廣井雄一：保育表現技術の自己教育プログラム構成：絵本の読み聞かせの技能向上を目指して，國學院大學人間開発学研究，6，pp.111-120，2015.
- 12) 結城孝治・吉永安里・山瀬範子・廣井雄一：保育表現技術の習得における評価方法の影響：絵本の読み聞かせ技術を題材にした聞き手との相互作用への気づき，國學院大學紀要，53，pp.159-178，2015.
- 13) エウゲーニー・M・ラチョフ，うちだりさこ（翻訳）：『てぶくろ』，福音館，1965.